

勇貴へ

とうとう高校最後の弁当に
なりました。

数々の弁当、食べてくれて

ありがとう。弁当の事で

いろいろ会話も出来た。

次、いつ勇貴、急に弁当を

作るかわからないので、この弁当

味も、食べて下さい。

長い間の高校生活、楽しかったね。

残り少ない時間、反々大切な時間、

すぎにね



三井物産株式会社

ありがとう。

田村

特集／新市誕生 10 周年

「愛」を感じるまち

1つの写真が、今インターネット上で話題になっています。

それは、高校生活最後のお弁当に添えられた、母が息子へ送った手紙。

息子さんが感謝のコメントとともにツイッターに投稿したところ、

たちまち日本中の人たちに拡散。少なくとも4万人以上がこの投稿に触れ、

「素敵なお親子」「泣きそうでした」「親孝行してあげてください」など

温かいコメントを寄せています。

この手紙の写真を投稿したのは紙屋の高校生内村勇貴さん。

今月号では、市内の日常にあふれる3つの「愛」を紹介し、まちの未来を考えます。



うちむらふみこ
内村文子さん
ゆうき
勇貴さん

そして、1月27日、高校生活最後の弁当となる日。文子さんは、いつもより少し大きめの弁当箱で最後の弁当を作りました。「3年間作ってきて私自身楽しかった。せっかくだからその思いを伝えよ

文子さんは、高校3年生の勇貴さんのため、3年間、毎日弁当を作ってきました。この弁当を通して2人にはさまざまな思い出があります。そのひとつ。それは日常生活で、「量が多いなど文句を言われたこともありますが、忙しく弁当が作れないときに、パンを買ってねという勇貴はいつも不満そうでした」と文子さん。「パンよりもお母さんの作る弁当の方が美味しいから」と少し照れくさそうに勇貴さんは話します。

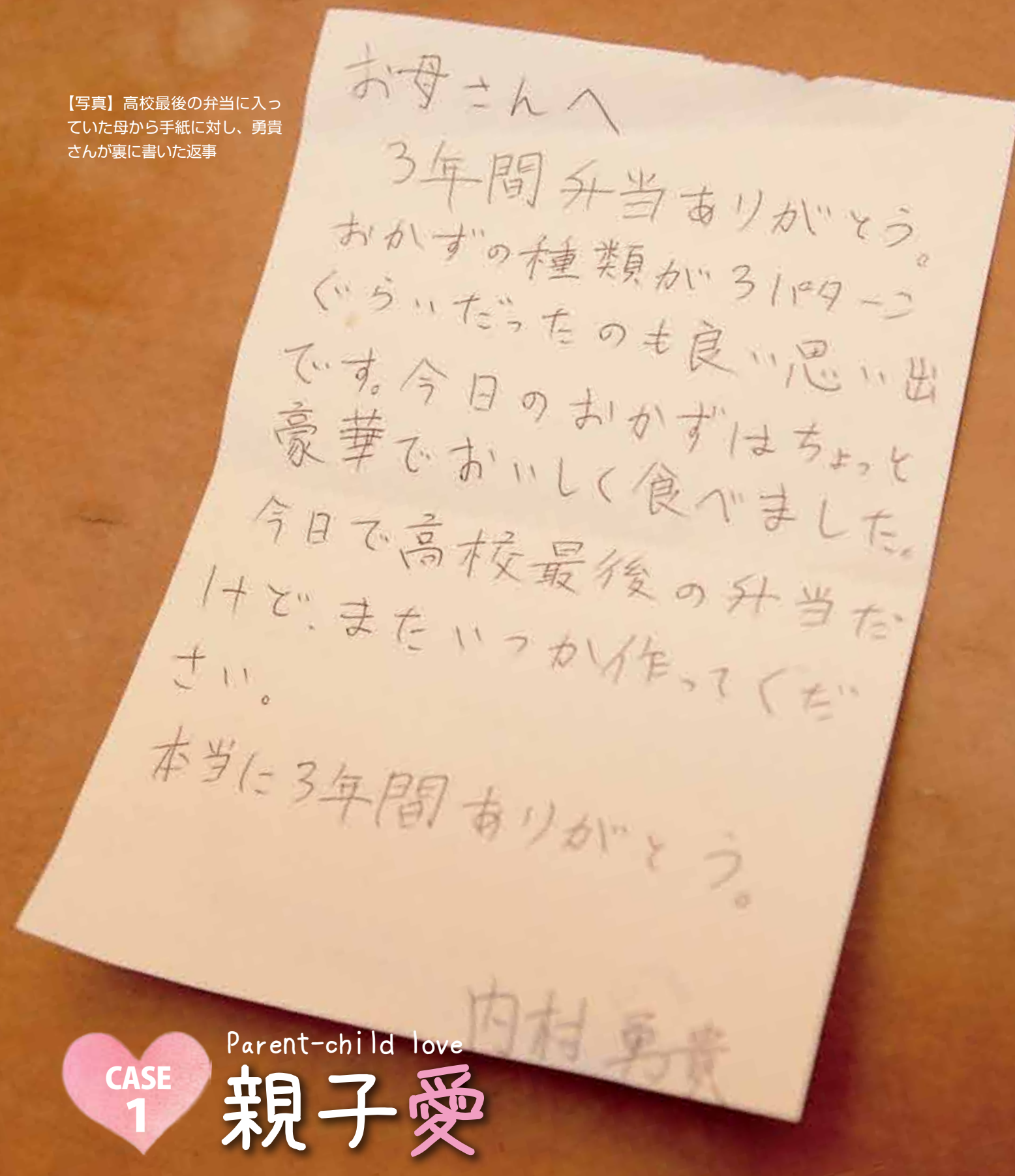
「感謝の気持ち伝える」 弁当を通して深まる親子の愛

「母が子どもの弁当を作る」。これは、多くの家庭で行われている日常。そんな日常にある愛を、内村さん親子を通して紹介します。

日常にある何気ない「愛」 日本中の人の心に響く

「量が多いなど文句を言われたこともありますが、忙しく弁当が作れないときに、パンを買ってねという勇貴はいつも不満そうでした」と文子さん。「パンよりもお母さんの作る弁当の方が美味しいから」と少し照れくさそうに勇貴さんは話します。そして、1月27日、高校生活最後の弁当となる日。文子さんは、いつもより少し大きめの弁当箱で最後の弁当を作りました。「3年間作ってきて私自身楽しかった。せっかくだからその思いを伝えよ」と文子さん。この手紙に気づきました。「普段はおいしいとかあまり言ってくれる子じゃないので驚きました。本当にうれしかったです」と話す文子さんの目にはじんわり涙が浮かんでいました。勇貴さんは4月から東京に就職します。「もうお弁当を作ることはないと思うと寂しいですね」と文子さん。「社会に貢献できるように大人になって、お母さんに恩返しをしたい」と勇貴さん。母への感謝の気持ちを伝えました。

【写真】高校最後の弁当に入っていた母から手紙に対し、勇貴さんが裏に書いた返事



Parent-child love CASE 1 親子愛

勇貴さんは最後の弁当を食べ終わった後、母文子さんに手紙を書きました。3年間毎日弁当を作ってくれた感謝の気持ちを込めて。文子さんは、この手紙を読み、涙がこぼれそうになったそうです。

平成27年8月、地元消防団を中心に発足した西小林青年団どうじゃる会。メンバーは、20代から30代の地域を愛する若者20人。「子どもから高齢者までが交流できる」ということにこだわりを持ち活動しています。これまで、地域の清掃活動やイベントに出店し資金を集め、小学校への寄付などを行ってきました。現在は、西小林地区全体での十五夜や十数年前まで行われていた「ひよっこ踊り」の復活などに取り組んでいます。

成田憲典会長は「子どものころ地域を盛り上げていたイベントや伝統を受け継ぎ、子どもたちに伝えていきたい。過去から現在、そして未来へつなげたいんです」と力強く言います。

まだまだ、彼らの活動は始まっ



ひよっこ踊りの練習には、メンバーの子どもたちも参加しています。

地域のために集う若者が築くこのまちの未来

このまちを作ってきた伝統を受け継ぎ、つなげるための活動する西小林青年団どうじゃる会。地域愛あふれる彼らの活動を紹介します。

地域の過去と現在と未来をつなげていきたい

たばかり。「これから活動していく中で大変なことはたくさんあると思います。それをこの仲間たちの絆で乗り越えていきたい」と話しています。

「地域を盛り上げ、次の世代へつなげていきたい」という同じ思いを持つ若者たち。彼らに、地域への愛を感じました。そして、彼らのような人たちがこのまちの未来を築いていくに違いありません。



CASE 2

Family love 家族愛

4世代家族 富永さん一家

このまちで感じる 家族一緒に暮らせる幸せ

須木の奈佐木地区に住む富永さん一家は4世代7人家族。多世代で暮らす人が少なくなっている今、改めて家族の愛について考えます。

家族が多いと賑やかで楽しい
健康で仲良く暮らしたい

富永圭一さん一家は、父利秋さん、母美佐子さん、妻志保さん、長男俊輔さん、長女柚羽さんの3世代が同居し、隣家には祖母のツ子さんが暮らしている4世代の家族。「4世代はもとより3世代で暮らすことも難しいなか、家族が一緒にいることに幸せを感じています」と圭一さんは言います。

家族みんなが大好きなのが、ツ子さんの手料理。「この味で家族全員が笑顔になります」と口を揃えます。年末には、ツ子さんに教わりながら家族でソバを打つなど毎年、全員でおばあちゃんの味を感じています。長男俊輔さんは「ソバ打ちは簡単ではない。ひいおばあちゃんはずごい」と自慢げに話してくれます。

家族が多い分、ぶつかってしま



ツ子さんに教わりながらのソバづくり。年末で、親戚も帰って来てさらに家は賑やか

うこともしばしば。「けんかをすることもありますが、賑やかで楽しいです。これからも、全員が健康で仲良く暮らしていきたいですね」と圭一さん。

このまちでは、多世代で暮らす家庭や近くに祖父母がいる家庭が多くあります。都会では珍しい、田舎で暮らしているからこそ残っている家族の愛がここにはあるのかもしれません。

西小林青年団 どうじゃる会

Regional love 地域愛

CASE 3





このまちでもっと 「愛」を育もう

このまちの未来を明るくする
日常の中にあふれる愛が

都会では人と人との繋がりが希薄になっていくという話をよく耳にします。しかし、このまちでは今もなお、大切な人のために地域のために協力し行動している姿がたくさんあります。

内村さんのように、母が子に弁当を作っている家庭はめずらしくありません。それが、ネット上で話題に上がったのは、日本中の多くの人たちが当たり前前の日常生活の中にある「愛」を感じたから。

これは特別なことではなく、多世代が同居する富永さん一家や地域のために集まり活動する西小林青年団、そして内村さん親子と同じように家族愛、地域愛にあふれた人たちがこのまちにはたくさんいます。その一人一人の「愛」がこのまちの「宝」です。

今年の新市誕生10周年。これからも日常にあふれる「愛」のすばらしさを認識し、大切にすることで、まちの明るい未来が見えてくる気がします。



※第1・2回でなんど小林プロジェクト写真コンテストの応募作品と過去の広報紙の写真を掲載しています。